

文楽と花街 北新地思い出語り

人間国宝竹本住大夫師匠

文化功労者顕彰祈念祝宴

2006年6月17日(土) 午後5時～9時

協力：料亭 花外楼

七世竹本住大夫師匠：

本名 岸本欣一。大正13年大阪生まれ。実父は鶴澤友吉、義父は人間国宝の六世竹本住大夫。大阪専門学校(現近畿大学)法科卒業。文楽大夫。芸術院会員。重要無形文化財保持者(人間国宝)。平成17年10月、文化功労者として文部科学省より認定。

西川梅十三さん：

本名 奥川君子。昭和13年京都市生まれ。9歳から西川流の日本舞踊を習い、先代家元西川鯉三郎の子役を務める。28年、梅十三の名で大阪北新地の芸妓に。平成11年に芸妓を引き、西川流師範・西川梅十三としてNHK「芸能花舞台」に出演するなど舞踊家として活躍中。

北新地・金鈴・金衛・さく一

竹本住大夫師匠の七光り

熟塾を主宰していなかったら、出会わなかった方々が沢山いる。気付かなかった多くの大阪の文化や歴史絵巻もある。

江戸時代から大阪の町人の楽しみとして「文楽」世界遺産にも登録された、大夫・三味線・人形が一体となって繰り広げられる様々な人々の思いを伝える舞台芸術。情を語る大夫の最高峰・人間国宝の竹本住大夫師匠をお迎えして、文楽と花街・北新地思い出語りを花外楼で開催した。熟塾では、住大夫師匠に2002年1月12日「人間国宝竹本住大夫氏と出会う新春文楽鑑賞会」として舞台を拝見し、お話しを拝聴する機会を得た。また旗揚げ10周年の中央公会堂でのイベントの時にも出演いただき、縁台に腰掛け思い出話をお話しいただいた。住大夫師匠の義太夫は当然素晴らしいが、思い出を語られる普段の大阪弁のリズムもはんなりとしていて心地よい。舞台上で師匠をご紹介してバトンタッチして、私は中央公会堂の舞台の袖で様子を見ていて感動した。客席から咳払い一つ聞こえない。聴衆が一心に住大夫師匠の話に有る意味むさぼる様に耳を傾けているという空気が、大きな塊となり押し寄せてくるのが舞台の袖まで伝わってくる。何気ない話を淡々とお話されているのだが、その大阪弁の流れと人柄が、自然と観客の心を掴んでいる。人間国宝とは芸が一流であるというだけではなく、人徳の輝きがあり、人と成りから溢れ出るオーラ、まさに七光りに満ちているのだと敬服するばかりだった。

今年2月5日(日)午後4時から、大阪上本町の都ホテル「浪花の間」で、『竹本住大夫師匠の文化功労者顕彰を祝う会』が開かれた。熟塾宛に招待状を頂戴したので、塾生で文楽ファンの船場の三代目の三男坊の北原祥三さんと、文楽友の会の会員でもある東口恵子さんと共に参加させていただいた。午後4時から、NHKの芸能花舞

台などの司会を務める葛西聖司氏の開会挨拶で進行が進み、祝辞には前財務大臣 塩川正十郎氏が筆頭に、行政改革担当大臣 中馬弘毅氏、文化庁長官 河合隼雄氏、大阪府知事 太田房江氏、大阪市長 関淳一氏、関西経済連合会会長 秋山喜久氏、大阪商工会議所会頭 野村明雄氏と要人の挨拶が続いた。更に、日本芸術院院長 三浦朱門氏のメッセージを東京から駆けつけた常磐津英寿氏が代読。道明寺山主 六條照端氏が記念品を授与され、住大夫師匠のお礼の言葉。「いくつになっても表彰してもらうのは嬉しい。これも長年支えていただいたお客様、家族、特に長年連れ添ってくれた妻のお陰。女房にはほんまに頭があがりまへん。」と傍の夫人へ思いやりの笑顔が印象に残った。続いて、舞台では“祝演”開幕。花競四季寿“より“漫才”を、浄瑠璃を竹本千歳大夫、豊竹呂勢大夫が、三味線に 野澤錦糸 鶴澤清二郎 鶴澤清旭、人形では大夫を吉田和生・才蔵を桐竹勘十郎が演じ、更に北新地 日の春三番叟を 西川梅十三さんの舞踊が飾った。会場に詰め掛けた文楽関係者が舞台に勢ぞろい、奈良豊澤酒造から寄贈された樽酒で鏡開き。文楽協会理事長 上山善紀氏により乾杯の音頭によって祝宴が、始まった。メインテーブルには、人間国宝の桂米朝氏 茂山千之上氏らが陣取り、京都から井上八千代さんが、花束贈呈に女優の竹下景子さんの姿もあった。別世界に迷い込んだようであったが、その中心で輝く住大夫師匠の大きさをまじかに拝見し、改めて大阪の誇りであるとも再認識した。

近松と文楽と花街と

その祝いの席を飾った西川梅十三さんの舞が特に印象に残ったものの、沢山の方々が詰め掛けたパーティ会場ではゆっくりと拝見できないのが残念だった。

熟塾でも、2000年3月に道頓堀散策と料亭大和屋の芸妓菊つる・菊江さんを囲む会として、文楽のプログラムに長年文楽の演目と史跡を紹介されていた朝日カルチャー講師の田結莊哲次さんのご案内で竹本座跡や二井戸や道頓堀を歴史散策し、大和屋の館内を見学。昼食を食べながら菊つるさんと菊江さんにお話しを聞く機会を得た。しかし、その後大和屋はあの立派な能舞台共々南地から姿を消してしまう。時代の流れだというには惜しすぎる。

大和屋に続く道頓堀川に架かる相合橋を通る度に、私はなんだか楽しくてしかたがない。江戸時代、この橋が中橋と呼ばれていた頃、近松門左衛門の名作「心中重井筒」の中で、「月ははや 渡り初して中橋や 六軒町の小夜が・・・」と文楽の舞台になっている。当時は、この橋の南側には江戸時代の日本のブロードウェイとして芝居櫓が居並び、北側のお茶屋町を結ぶ橋として多くの人々が行き来し、その中にきっと近松の姿もあっただろう。橋の真ん中に立って、さてさて次にどんな出し物をと夕涼みを兼ねて考えていると、その後ろを人目をはばかりのように通り過ぎる若い男女の人影が走り去る。鬢付け油の香りも艶っぽく感じられる夜の闇の中、川面に浮かぶ月の影をきくと近松は眺めていたのではないだろうか……。今は自転車置き場かと見まがうような雑然とした相合橋が、私には近松と花街を結ぶ橋であるかのように思えて、その後姿を感じながら歩いていると往時の賑わいが蘇ってきて楽しくてしかたがないのだ。

その近松の曾根崎心中など多くの作品に描かれていた大阪の花街の存続が危惧されている。大和屋という南地にその面影を残していた大きな暖簾も消えて、新地の芸妓さんも数少なくなったということは聞いていた。大阪の花街が文楽や歌舞伎だけの世界になってしまう・・・。住大夫師匠のお祝いの席を飾った優美な舞。この宴席に参加できなかった熟塾のメンバーとも、お祝いをしたいと思いついた。パーティ会場で梅十三さんにご挨拶しゆっくりとその舞を見せていただきたいと、名刺を交換した。同時に、住大夫師匠のお祝いの席に相応しい会場は、いつも無理ばかりを御願ひしている花外楼をと、徳光女将の顔も思いつく。十周年のイベントで、住大夫師匠が新地で育ったので中央公会堂あたりは遊び場だとおっしゃっていたので、震災で焼け落ちる前の新地の賑わいをご存知なのだろうと漠然と思っていた。だから、この機会に文楽と花街 北新地思い出話を拝聴したく、そこに戦後北新地と芸妓として、ホリエモンのような私益追求だけではない、大阪の復興を支え、社会の為の企業の在り方や将来の展望も十分に視野に入れた本物の経済界のお歴々の素顔をまじかに眺めてきた梅十三さんのお話と舞が加われば、近松の見た花街に続く戦前戦後の新地の面影を拝聴できると確信した。その旨を、梅十三さんと、徳光女将に打診してから、思い切って住大夫師匠にお電話をした。流石にちょっと緊張した。文化功労者顕彰記念とのお祝いに花外楼で梅十三さんと、切り出した。熟塾が主催することなので大層なことはできませんが、是非師匠を囲んでお祝いをしたいと切り出した。師匠は逆に大丈夫かと案じていただきながら、5月は東京やから、6月19日ならとお返事をいただくことができたので、早速、梅十三さんと徳光女将に花外楼の予約を確認し日程を決定した。

熟塾旗揚げ以来、ツアー以外で一番高額の会費となり、一般的には高価かと思われる二万八千円の会費も、花外楼では破格値だが、さてどれだけの方にその趣旨を理解いただけるか。チラシを前にまたまた腕組が始まった。塾生の南でクラブ「群芳」を経営している松井さんは梅十三さんの舞も見ることができると喜んでいただき、佐々木英彰さんは地方を担当してくださる北新地の金鈴さんと金衛さんとは昔からの馴染みだという。下野さんは友人に声をかけていただき、北原さんは精力的にチラシを持ち歩き、遂には自民党の中馬毅内閣府特命担当大臣に、公明党の田端正広衆議院員、梅本のりふみ大阪府議会議員が出席いただくことができた。京都祇園からまなみさんという芸妓さんも参加いただき、どうか当日は66名の参加者を数えた。

そして当日

当日は梅雨の季節、暦通り霧雨が大阪北浜の花外楼を包んだ。三々五々参加者が、花外楼の敷居をまたぐと、「いらっしやいませ」と玄関で下足番の方のやわらかな声が響く。目の前には大きな窓一杯に広がる大川の流れに北の町が一望できる。梅十三さんらは、勝手知ったる花外楼とばかり準備万端。

受付を手伝ってくださる塾生の谷さんに東口さんと中村京子さんが居並び、下野さんと北原さん、米川さんが誘導係りとして早めに会場に入り、村上蕪芳さんはビデオ

係りとして、杉山さんも愛用の一眼レフのカメラを胸に会場の下見。折角だからと、単の着物を着ようと頑張っていたがあいにくの雨で美容院で髪をセットしてもらい、着付け教室の先生である森さんに花外楼の一部屋を借りて着付けてもらう。途中、下野さんが大臣がおこしになったと襖越しに声が掛るが着付けの最中、慌てて駆け下りると国会開期中だったので今朝もテレビで拝見した中馬大臣のお姿があった。「お忙しいところをありがとうございます」とご挨拶すると「いい企画だね。」と返事が返ってきた。とても残念だけれど時間が無いので住大夫師匠に挨拶してお帰りになるとのこと。そこにカメラを手にした村上さんが下りてきたので、記念に写真をと一枚パチリ。大臣までご足労いただいた。申し込みがあった後に、秘書の方に確認するとたぶんの奥様が参加されるだろうということだったが、これは勿論すべて住大夫師匠の七光りのお陰だが、このような文化活動にも目を向けてくださった中馬大臣の視野の広さに感謝。本当にお時間のない大臣の足をお留めしてしまった。お見送りをした後、住大夫師匠のお部屋に挨拶に伺い、当日のおおまかな段取りを告げると、新地の思い出話は、一人ではなく梅十三さんたちと一緒にあれこれと話をしたいとのことで賑やかにお話いただくことになる。



桜の枝のシルクの傘

会場は二階の広間、金屏風が設えてあり、赤い毛氈が、会場には前の方は座布団席で後方は椅子席が用意されている。5時過ぎ、まず原田の挨拶に、住大夫師匠をご紹介し、金屏風の前に。

まずは、文化功労者に顕彰されたことをお祝いして北原さんが手配してくれた花束を、着物姿の森さんから、記念品として何かをと頭をひねってたが、「竹本住大夫」と名前が入った傘をと思いついて百貨店をまわったが、これが以外に難しかった。そごう、大丸には高級傘はあっても名前いれはしていないとのこと、大丸のダンヒルの店員の方が、「そういえば高島屋にあったような・・・」というアドバイスをいただき、心齋橋筋を南下し高島屋へ。店中を見て歩くのは疲れたので、先ず総合案内で確認すると電話で何軒か確認した結果、傘の柄に名前を彫ってもらえる店が、和装品売場にあるとのことで直行した。鞆や下駄・草履に舞妓さんのコッポリらしきものまで並べなれている京都が本店の店。傘はありますかというとき、シルクの傘があるとのこと、薄い上品なベージュ一色の表地で裏は緑の格子柄、柄は一本の桜の枝を磨いたものとのこと。確かに取っ手に桜の枝そのままの風合いを残して趣があり、生地もシルクだからとても軽い。和服姿が多い住大夫師匠にはちょうどよいと、名前を入れてもらうように御願ひをして前日に取りに行っていた。念のため柄に彫られた名前を確認すると、もっとキリッとした文字を期待していたのにと、私がうかぬ顔つきで覗き込んでいるので、店の方が「桜の木が堅いので彫り



にくかったように「・・・」と言葉を添える。何やら可愛い字になっている・・・。記念品をお渡しするときに、「雨の日も、日傘として晴れの日も

お供したくて、桜の一本枝の柄のシルクの傘をご用意し、柄にお名前を彫ってもらいましたが、桜の木が堅くて可愛い住大夫師匠になってしまいました。」と申し上げると、「ええ、可愛い住大夫ってかあ。ぼくにぴったりやがなあ。」と合の手が入り客席から笑い声が上がり、場が和らぐ。着物姿の森さんのお友達の木村さんから贈呈いただく。

花束と記念品の傘をお渡ししたところで、お祝いの舞をとご紹介しようと私がもたまたましていると、住大夫師匠が「ぼくの方が、よう知ってるさかい」とマイクを握り自ら北新地の金鈴・金衛・さく一さんが舞台を紹介し、呼び出していただく。

三名の息が整ったところで三味線の音が座敷に響き、鶴が三羽ばたく絵柄の扇を手に西川梅十三さんが登場し、祝い舞「日の春三番叟」を披露。途中、鈴を手に五穀豊穰・家内安全と大地を踏みしめる三番叟でありながら座敷で舞うだけあって、どの動きも無駄なく柔らかだ。梅十三さんは薄墨桜の薄紅色の無地の着物に裏地は戌年の戌の文字をあしらひ裾引き模様として顔をだす。住大夫師匠と共に舞を楽しむ。



北新地思い出語り

そして、講演会としてお話しをということで、椅子を2つ並べると、梅十三さんは着物姿のせい、師匠と同じ目線ではと思われたのか、すかさずこの方が落ち着きますからと椅子の傍に座られた。



その後は、住大夫師匠の話に梅十三さんらが合図で打つ形で思い出話を拝聴した。

住大夫師匠:今日は文楽の話はやめときましょなあ。新地に生まれ育ったといっても昭和11年までしかいてなかったんで、戦後の新地の話は梅十三さんに手伝ってもらいながら話ししまひよ。私は大正13年の生まれです。堂島の船大工町に生まれまし



昭和5年10月 6歳

て、ちょうど堂ビルの正門入ったところですけど、「淡路屋」いうて旅館がおまして、そこが私の実家でしてん。そこでオギャーって生まれるなりに私の叔母の家にももらったんですが、叔母の家が当時文楽の大夫で竹本安大夫、のちの住大夫なんですけど、御堂筋の突き当たり、今でいうたら新御堂のところで「玉井」という煙草屋をやっていたんですが、当時外国煙草を売っていたのはうちだけでした。注文聞きのおじさんがいて、料亭から料理屋さんまで注文聞きに歩いて繁昌してました。当時の北新地は、情緒がおましたなあ。道歩いていたら三味線の音が聞こえる。唄の音が聞こえるねえ。夕方なったら芸はんが金たらいやら桶もって銭湯いかはりますやろう。都島タクシーのあたりに「大黒湯」とかねえ。前の毎日新聞社のあたりにも一軒ありましたけどなあ。芸はんがお風呂いかはる姿が艶やかで、わたしもませますわなあ。環境が良すぎてねえ。

当時は新地の本通りと俗に永楽町っていうてたんですけど、両方とも御茶屋だらけでしてねえ。料理屋さんいうたら、菊屋さんとか、上勢っていう仕出し屋さんがおましたけど。そんなことはよく覚えてます。芸はんの店が何軒おましたやろかなあ。大西はん、平田はん。伊勢屋があった。古沢があった。津川席っていうのがあった。

当時「店だし」いうて芸はんのお披露目がおまして、芸はんには男使さんと姉さん芸者がついてずっと各御茶屋さんをまわらるんですが、私何処で聞いてきたのか「おかあちゃん、今日大西席でお披露目があるでえ。」というて、その後をずっと着いて歩いたんですわ。ほんまに、おませ。初天神には、天満の天神さんにほえ籠が outcome 出ましてねえ。新地から老松町通って天神さんまでいくのに、その後も追いかけていきましたわ。ええ雰囲気でした。今とぜんぜん違う。

戦争で焼けましたけど北陽演舞場がありましてね。今の四橋筋から西へちょっと行ったところですけど、北新地は浪花踊り、宗右衛門町は芦辺踊りとか、新町、堀江とかにみんなそれぞれに歌舞練場があつて、そこで芸はんが踊りしやはりますんやけどねえ。今でも芸はんは芸はしっかりしてますけど、昔もええ芸はんがたん



北陽演舞場(産経ホールあたり)

梅十三さん: 昔は北新地は他所の嫁はんと遊んでいるみたいといわれるくらいに、旦那様がこの芸子さんにはこの旦那さんと決まっています、はっきりとしたはったわけです。南はちょっと浮気ができやすいので、北はよその嫁はんと遊んでいるみたいでおもしろないといわれはったそうです。

住大夫師匠: 実母も育ての母も、両方とも北の芸妓はんでしてん。結婚するなり、やめましたけどねえ。煙草屋してたら、当時の朋輩衆やら、若い芸妓はんとかが、よう煙草買いにきたはりましたなあ。お師匠さんといえば、西宮の花柳吉蔵さんに、西川さんがいたはったし、芸妓さんには梅とか金とかついてましたなあ。

梅十三さん: 梅筋・金筋・富筋とおましたなあ。梅筋はかなり古いそうです。

住大夫師匠: 私、小雪さんという人が好きでしてねえ。

梅十三さん: こわいお姉さんでした。

住大夫師匠: へえ、本名、藤原さんっていいますねん。僕の友達の姉さんですわねん。

梅十三さん: 黙ったはって、怖いお姉さんでした。



浪華商業入学当時

住大夫師匠: 別嬪さんでしたなあ。ちょっと顔に痣がおましたなあ。

梅十三さん: ええ、綺麗に隠したはりましたけど。

住大夫師匠: 芸は、よろしおましたなあ。

梅十三さん: 地歌舞がものすごくよかったです。オホホーとしか笑われへんか

といたはりましたねえ。お師匠さんも皆ええお師匠さんがいたはりましたなあ。

ら、寝たはるとこも静かやろうなあと思ってたけど、名古屋踊りを見て帰ったとき新幹線の中で寝たはる姿が車掌さんが通れんくらい寝たはったんで『おかあさんもこんなところがあるんや』と、それから物が言いやすいなあと思えるようなお人でした。

住大夫師匠: 昔は北でも、南でも、新町でも、堀江でも義太夫芸妓さんのしっかりしたのがいたはりました。文楽のお師匠さん方が、稽古に行っていましたなあ。そやけど、義太夫芸妓さんにあんまり別嬪はいまへんねん。この娘、不細工やなあ。そしたら義太夫芸妓にしよかあということになって、顔のいい子はみんな踊り手にいかはりますねん。そやけど、皆芸は達者でした。まさこさんも、いてた。新町に行ったらこさださんが、いてはりました。こさださんは義太夫芸妓やったけど、別嬪さんでした。子供の頃、ぼくのこと、欣ぼう、欣ぼういうて呼んでくれはりました。ええ稽古してもろたはったし。

当時ね、文楽の人はたいてい、御茶屋をしたはりました。先代の喜左衛門師匠が、清元という丸宏タクシーの筋向いで小さいお茶屋さんをやったはりました。先代の勝一さんも勝也という御茶屋さんをやったはったし、おかみさんが元芸妓だあ。堂島にも三味線弾きの松大夫の娘さんも芸妓に出て、この人も綺麗やった。平野町の御領神社に文楽がおましたやろう。北と文楽とは、切っても切れん間柄ですなあ。

梅十三さん: あんまり艶っぽい話はききまへんなあ。

住大夫師匠: 先代の喜左衛門師匠のおかみさんが、北の芸妓の勘八さんという人だしたんやけど、この方の師匠が勘次郎さんっていいましてねえ。昔は弟子どうして結婚したらあきまへん。弟子どうし結婚したら首、どっちも破門されて、そういう厳しい仲でしたけど、その割にはよう浮気したはりましたなあ。それでも、芸だけは皆一生懸命やったはりましたなあ。

そういうたらわたしらの恥になりますけど、昔から文楽いうのはあんまり儲からんとこでっしゃろ。皆嫁さんが、うちは煙草屋してたし、御茶屋したはりましたし、婿さんは婿さんで家に帰ったら、嫁さんが酒飲んでお客さんと一緒に騒いでいるので、おもしろいから、外へ出て行こうかというものおましたしなあ。そやけども、芸だけはそやけど一筋通ってましたねえ。

梅十三さん: わたしは、戦争でそんなお茶屋さんも焼けてしもうてない昭和28年に大阪に来たんどす。その時は、本通もありましたけど、今はそなんおまへんでしたけど、本通りの右も左も細いドブ板で、覗けるような大きな節のあるあんまりええ木ではない囲いの茶屋さんが建ってた記憶があります。

でも芸妓さんはその時で、三百人足らずいたはって、お茶屋さんもものすごく沢山ありました。ご挨拶回りするときに、裾を持っている手が痛いなあというくらいご挨拶まわりはしました。

住大夫師匠：昔からそうですなあ。花柳界が盛んやったら、私らの芸能界も盛んですなあ。これは持ちつ持たれつですなあ。今はちょっとお互いが沈下していますけど。これは花柳界が盛んになってもらわな、私たちの芸能界も華やかにならんと思いますなあ。

梅十三さん：京都は羨ましいと思いますわ。今でもお茶屋さんがたくさんありますし。大阪はお茶屋さんがあらへんので。

住大夫師匠：今、大阪で何軒ありますねん。

梅十三さん：北で、三軒くらいです。

住大夫師匠：お寂しいことで。

梅十三さん：そうですねん。

住大夫師匠：昔は京都でも、東京でも、大阪でも大きな御茶屋さんやのうて、小さい御茶屋さんがたくさんありましたなあ。そのお茶屋さんの女将さんとか、仲居さんとか皆粋も甘いも嘯み分けた人でねえ。遅うに行つて芸妓さんが御座敷いってますやろう。その帰ってくるまでの楽しみっていうのは、ええもんでしたなあ。大きな炬燵置いてもろて、そこでお酒おいてもろてちょびちょび飲みながら「まだかいなあ。・・・」って時計を見ながら待っている気分はええもんでなあ。今そんな粋なお茶屋いうのはなくなりましたなあ。

梅十三さん：今は気短なお客さんが多いので、そんなのんびり待ってくれはるお客さんなんてあらしまへん。「あかんかあ。そしたら帰るわ」で終わりやし、宴会もこの頃はものすごく早ようになりました。「明日ゴルフや」「明日会議が早い」とかそんな人がおいやしたらあんまりゆっくり遊んでくれはらしまへん。そやから芸妓衆も早うおわりますねん。

住大夫師匠：私らでも、今はそんなせえしまへんけど、若いときは飛んだり跳ねたりしましたなあ。芸妓さんにかくし芸教えてもろたり、それでまた和やかになってねえ。今はせえしまへんけど、私はええ時代に生まれて育ちましたなあ。

梅十三さん：そら 幸せやったと思います。

住大夫師匠：そやからうちの若い連中は可哀想です。真面目すぎるっていうのか、甲斐がないというのか。やっぱり石部健吉ではあかんし、というて極道ばっかりしてもあきまへんしねえ。遊んだ分だけ勉強せえ、勉強した分だけ遊べいますけど、私も嫁はんには嘘ばかりいうてよう遊びにいきましたけど、その分よう勉強しました。でっせ。私は生まれつき不器用で声が悪くて鈍ですけど、芸事が好きやからよう勉強しました。

昔、北には花月っていう寄席がありまして、一週間毎

に演目が変わるんですが、変わる度に行つてましたしねえ。当時、南の法善寺の花月は入りがいいんですが、北の花月は少のうてねえ。わたしら好きやからちよっぱなから行きますやろう。お客さんが5、6人しかいてまへんねん。林義男にならはった、小春団治っていう人が、「ぼんぼん、早うから来てくれはつてすんまへんなあ。」っていわれますねん。

梅十三さん：寄席といえば、今日も春之輔師匠がお見えですけど、天満に繁昌亭いうのができますやろう。

住大夫師匠：天満にも寄席がおましたさかい。ぼくら十丁目筋いうたんですけど、天満劇場いう芝居小屋で後に映画館になりましたけど、天神さんの北門の亀の池の所に、映画館があつて、浪曲も寄席もありました。宮崎倶楽部は、天満劇場のまえには八千代座いうてたんです。松島にも八千代座があつて、当時関西歌舞伎で暖簾のない人がそういうところで芝居してたんですわ。それはそれで芸も達者で面白かつたですわあ。天満は天満で芸事が盛んでした。十丁目筋が繁昌しなあきまへんなあ。亀の池は今でもあるんでしょ。昔そこにお寿司屋があつたり、中華楼っていう二階建ての店があつて、そこが中華料理店の北のはしりでした。その隣が新猫っていう料理屋さんがあつて、その隣が女義太夫さんの綾之助さんっていう人が御茶屋さんやつたはりましたな。

梅十三さん：綾之助さんっていうたら、平近さんのお父さんの彼女やつた人でっしゃろ。

住大夫師匠：そう、そう、そうですねん。子供心に、うちの親が私にみなしゃべりますねん。私もそんなことはよう覚えてますねん。昭和11年まで北新地で煙草屋してて、今里新地が新興地やいうて、そこで御茶屋しよかあというて、昭和12年に今里に行つたんですよ。そしたらね。うちのお袋びっくりしてましたわ。お茶屋を買つて行つたんですが、お座敷に大太鼓が置いてあつたんですよ。北新地に大太鼓は絶対置いてなかつたんですよ。

梅十三さん：戦後、私らの時は大太鼓はもうありましたわ。

住大夫師匠：大太鼓はちょっと落ちますさかいに、北新地には絶対おまへんでした。そやから、ここは大太鼓置いてるってうちのお袋はびっくりしてましたけどねえ。私、芸妓さんが好きでねえ。お袋から、あんたそないに芸妓さん好きやつたら芸妓さんの嫁はんもらいいなあと言われたくらい好きでした。未だに芸妓さんは好きです。それとこういう量の上がいいんですわあ、倶楽部やバーいうのはかないまへんねん。

会長とか、社長さんとかがそんな遊びをしゃはれへんでっしゃろ。私よう言うんでけど、なんで秘書の人に申し送りしとかへんかつたんやいうてよう言うんですわ。

梅十三さん：昔新地の御茶屋さんいうたら、屋根どうしが繋がっていたんですわ。そやからみんなそろっと屋根をつたって、隣の他所の御茶屋さんにはいらはるんどす、黙ってお布団とか出して黙って遊んだはるんどす。確か今日はお客さんいたはらへんはずやのに何で音するんやろうと二階に上がると、隣のお客さんが勝手に上がりこんで遊んだはるんどす。

住大夫師匠：喜左衛門師匠のところ、狭い御茶屋さんやったはるんですけど、親父の使いで行った時に、亡くなった勝太郎兄さんがたすきかけてたらいで洗濯したはるんですけど、「お酒」って声が掛かると洗濯してた手を止めてお酒持っていかがはるんですから、そら流行らんわなあって言うてましたけどなあ。

若い時は色気づいているところに、昔はみな内弟子に行つて、皆掃除したり洗濯したりしてましたから、そんな姿を通りがかり芸妓さんに見られてかっこ悪かったって死ぬまでいうたはりましたなあ。

梅十三さん：昔お客さんがたすきもって来いっていわはったら、今日はこれから大掃除やいうて、御茶屋さんの畳みなあげはって掃除するのも昔はお遊びやったそうです。それとか、向かいのお茶屋さんに、うどん屋さんが注文されたうどんをたくさん持っていくんです。そしたらそこのお茶屋さんは「わてとこは注文しておりまへん」て言わはりましたら、うどん屋さんが「いいえ、持ってこいって言わはりました」向かいの御茶屋さんのお客さんが窓から持っていけって注文しはったりして、受けはった御茶屋さんが困ったはりました。

住大夫師匠：私のおふくろね、私が小学校4年生のとき、『鬢のほつれは咎よ』って唄教えてくれますねん。何のことかわからんけど、お袋が三味線引いて「欣ぼう、教えたあげるわ」っていうて、何のことかわからんけど唄ってましたね。はるか昔のことですけどね。そうやって知らず知らずのうちにいろんなものが身についてんでしやるか。幼稚園行く前から文楽は行ってましたし、歌舞伎行くし、寄席は行くし、芸妓さんの踊りは見るし、いろんな所に着いて行ってわけもわからんのに、泣いたり笑ったりしてましたし、そういうことが今少しプラスになっているのかなあていう気がしますわ。

梅十三さん：小さい時の事ってよう覚えてますもんねえ。

住大夫師匠：やっぱり、頭で覚え体で覚えて滲み出てくるもんでないとあきまへんわなあ。芸妓さんでも、おちよぼさんから修行して、姐さん方にいじめられて、みな苦勞しはりましたわなあ。

梅十三さん：私はお姐さんよりもお客さんが怖かったですわ。お客さんがよう知っておいやすから、お座敷に出るときに襖あけて、「こんにちは。おおきに」って入っていった時に、「あんた、もう一遍出でおいで。」って言わ

れて、「襖あけておじきしてみい。」て言われますねん。もう一回出直すと「今度は、ええ格好してたなあ」って言われて教えてくれはりました。「そうやっておじきするんやでえ」って教えてくれはる旦那さんが多かったです。

住大夫師匠：昔はええ芸妓さんは、本宅に呼ばれてはりましたなあ。お正月はもちろん、ちょっとしたときでも、本宅にお客さんが送っていったりしてはりましたなあ。奥さんとも親しくなつて、本宅へも行かはる芸妓さんは、たいしたもんでしたなあ。

梅十三さん：元旦から、お宅にお呼びいただいたりして、お正月くらい休みたかったけど、呼ばれてお宅にいったらお酒つけたりみなしなあきまへんやろう。いろいろと難しおしたわ。

住大夫師匠：最近では芸能人と付き合いするのは、少ないのかいなあ。

梅十三さん：皆さん最近ではバーへ行かはります。

住大夫師匠：昔は花柳界の人も文楽や歌舞伎の舞台みにきてくれはったりして、御茶屋さんの女将さんや仲居さんと心安くなつてね。最後は、“芸”の話になります。初めはアホなこと言うていても落ち着くとこ“芸”の話になります。芸妓さんも私も芸が好きで芸の話になるんですなあ。芸妓さんの踊りでも文楽でも、行く道が違っただけで終着点は同じですもん。芸の苦勞・修行は同じですもん。芸は限りなく続きます。

私今年82歳ですけど、死ぬまで勉強ですなあ。未だに迷ってますもん。これでええというもんはないんですもん。今は後ろ髪はないけど、ほんまに後ろ髪引かれる思いでやっています。NHKなんて行ったら、いつでも嫌ですもん。カメラやマイクを前に置いてやるんですけど、非常に緊張してやりにくいけどやるんですわ。それやったら辞めとけばいいのに、断れわばええのに、根が好きやから言われたら行きますもん。

原田：お客さんの反応がないからですか。拍手がないからですか。

住大夫師匠：ここでお客さんに満足させようとか、拍手もらおうとか、そんなことは考えてはあきまへんわなあ。開き直つて、基本に忠実に素直にやっていますわ。それしか手がない。基本を覚えて基本に忠実にやっています。素直にやっていたらそこに何かが出てきて、その何かがお客様に伝わって、泣いたり笑ったりしてくれはるんです。ここで上手にやろうとか拍手をもらおうとか、そんなことを思っていたら、やっつけられまへんわ。評価するのはお客様で、こっちが『悪いなあ』と思つていても「よろしおますで」と言うてくれはるし、『良かったなあ』と思つていても「今日は具合悪かったですなあ」

って言わはる人もありますし、日によって違いまっせ。文楽でも落語でもテレビで観たと思っていたら、あかんと思います。やっぱり入場料払って、文楽でも落語でも、相撲でも野球でもほんまもんをみなあかんと思います。

私、野球が大好きです。私旧制の浪花商業行きました、戦争中でしたけど、当時野球が強くてね。野球部に入るのに、試験があること知りまへんでしてん。試験受けてキャッチボールは通ったんですけど、後で100メートル走らされてね。これで落ちたんですわ。頭重とうて走られへんかったんですわ。それでバレーボール3年やりましたけどね。今の近大の前身の大阪専門学校法学部へ行ったんですけど、選手になられへんのんわかってて補欠でキャッチャーでしたけど、全国の高等専門学校の予選大会っていうのが甲子園であって部員が20名くらいやったんですけど全員連れていってくれましたね。これでも甲子園の土踏んでるんでっせ。キャッチャーやプロテクターつけている間、補欠でキャッチャーで受けたりしてたんですわ。

野球やっていたので、今も商売と比べてみてるんですけど、浄瑠璃語りってピッチャーで、三味線ひきはキャッチャーですわね。この二人の息があわんことにはええ投球がでけへんし、守っている内野手や外野手がこれが人形遣いなんですわ。キャッチャーの調子がよければ、ピッチャーも受けよいし、内野手外野手も守りやすい。キャッチャーが乱れているときは、みんなの調子が悪い。そういう意味では、文楽では大夫の責任は重大ですなあ…。浄瑠璃のこと、言えへんいて言うてますなあ。



昭和16年 浪華商業
現大体大浪商高校

原田: 今年が終戦61年目ですが、戦争にいかれている間、文楽のことは考えていらっしやいましたか。

住大夫師匠: 戦争に行くまえに、親戚寄って送別会をしてくれたときに、娘義太夫の人に三味線ひいてもろて、寺子屋を語りました。うちの親父が観念して「おまえ、そないに好きやったら帰ってきて、大夫になれ。」て言うたんですわ。『これはしめた。絶対生きて帰ってきなあかん』と思いました。

当時私は松屋町と周防町のちょっと上がった所に住んでいたので氏神様が高津神社でした。出兵するときに皆さんに「万歳！万歳！」と送られているうちに、なんや悲しくなってきた、泣いたら男がすたると思って涙を堪えていたら、うちのおふくろが近寄ってきて「欣ぼう、危ないところへ行きなや。」て言うから、「行けへん、行

けへん。絶対生きて帰って来る。」と答えました。

十三ヶ月兵隊へ行っていて、上海と蘇州に行ってたんですわ。香港に行く予定やったんですけど、香港へ行く船が皆やられたために上海で三月足止めをくらっていて一回だけ空襲に逢っただけですわね。香港に行かれへんということで、蘇州に転属になって、えらいとこに回されてね。馬を引っ張って歩く方ですわね。馬の背中に機関銃を乗せて歩くんですけど、これが重もとうてねえ。馬を引っ張って歩くんですけど、私、第一に動物が嫌いですわね。怖おうてね。その馬が私をなめよってね。行軍してたら、馬が私の足踏みますわね。「そっちへ行け、そっちへ行け。」とするんですが、僕の顔を見て目をしょぼしょぼしてますわね。次の足出るまで私の足踏まれっぱなし。足の親指が青じんでました。

1時間行軍して15分休憩がおますわね。15分の休憩の時に馬を川に連れて行って足を洗ってやるんです。馬の足に鉄がはまっていますやろう、それを藁で洗ってやるんですわ。それを私一編足触るのが怖くてずぼらして兵舎に戻ってきて足洗ってやろうと思ったら、馬の蹄鉄がおまへんわね。生爪で歩いてるんですわ。これや可哀なことしたと思って、班長に言うたら「蹄鉄を探してこい！」とパンパンとピンたをはられたんですけど、そんな蘇州の山の中で探すことがでけへんから、始末書書かされて鍛冶屋に馬を連れて行ったんです。馬が暴れて鍛冶屋に入れへんから、放してやると馬が走りまわってね。それを上等兵が「どうどうどう」いうて、四本柱の所に馬を連れて入って括り付けて、金槌で足を叩いたら馬が「ヒヒヒーン」と鳴きますわね。可愛そうなことしたなあと思いましたけどね。そやから未だに馬をみたらゾッとします。

それと馬屋当番に当たったら、夜中に馬が藁の上におしっこやうんこしますやろう。それを朝手で干しますわね。その手で朝ごはんたべますわね。それと夜中に水を汲んできて水を飲ますんですけど、これも眠たいから一遍ずぼらしたんだ。そしたら明るる日、熱だしよってね。朝起きたら馬がひっくり返っているんで軍医を呼んできて、水やれへんかったというたら怒られるので黙ってましたけどね。馬に、わて苦労しますんやで。

日本政府に迷惑かけに行つたみたいなもの、十三ヶ月兵隊に行つて三ヶ月入院してまして、正味働いたのは十ヶ月でしゃろ。終戦直後は蘇州でしたけど、蒋介石という人は偉い人でっせ。私蒋介石を崇拝する。最後は「身の回りの物を整理しておけ」と言われて、『北に行つたらひよつとしたらこれは帰られへんなあ』覚悟しかけてたら八月十五日で終戦になった。その日、天皇陛下が何か言うたはるんやけど、何言うたはるか分かれしまへんわね。とにかく、日本は負けたということになり、そしてたら蒋介石軍が出てきて、武装解除してねえ。兵隊が丸腰になったら格好が悪くて見てられまへんで。收容されても三度きちつと食事をくれて、勤労奉仕ぐらいは狩りだされましたけど、虐待はされたことなかったし、蒋介石は偉い人やなあと思いました。

原田:無事に戦場からお帰りになって、こうして義太夫を語り、私たちに文楽を伝えていただけるというのは、きっと命を与えていただいだんじゃないですか。

住大夫師匠:私、ええ星の下に生まれましたね。私、運がいいんですわ。思わぬ出番が回ってきたり、指導者に恵まれし、何もかも恵まれてますねん。そやから私今死んでも何の悔いもありまへんなあ。生き恥をさらすよりも、今死んだほうが、「ええ人であった」というてもえますやろ。

田端衆議院議員:衆議院の田端といますが、先ほど中馬大臣もお見えになっていたのですが、文化功労賞というのは最高ですが、文化功労賞を頂いて、5年から8年頑張っていたら文化勲章になりますので、絶対長生きしていただくことが一番やと思っております。是非、これからも頑張っていたきたいと思っております。



住大夫師匠:文楽で文化勲章もらった人はいてまへんねん。そんな大それたことは望んでまへんけど、私とにかく初日から千秋楽まで無事に舞台を勤めさせてもろたらええなあとそればかり思ってますねん。

梅十三さん:大丈夫です。

住大夫師匠:おおきに。ほんまに私はええファンに恵まれ、家族に恵まれ、指導者にも恵まれ、ほんまに幸せです。

御座敷遊びを楽しむ

3階の大広間へ移動し、各6人ずつ11のテーブルに分かれて着席。先ずはお祝いの挨拶を、長年のお知り合いで同年配の美々卯の会長薩摩卯一様より「文化功労者となられましたこと、おめでとうございませう。先日も素晴らしい舞台を拝見し、大阪の誇りとしてこれからはますます



お元気で活躍されますように」とご挨拶いただき、芸妓衆が会場に入って手元の杯に日本酒を注ぎ入れていただく

ところで、塾生を代表して下野譲氏が、住大夫師匠の益々のご健勝とご臨席の皆様のご多幸を祈念してと乾杯の音

頭をとり祝宴が始まった。

食事は、籠に入った色とりどりの前菜から、氷の器に盛られたお刺身に、夏野菜の茶碗蒸し等懐石料理が次々とテーブルに並びそれぞれのテーブルで歓談するうちに、鮎や新緑の風景などを描かれた団扇が飾られている葦を編んだ涼しげな屏風を背に、紺の着物に着替えた梅十三さんが舞う端唄「筆の傘」を楽しむ。



そこで、暫し「トラトラ」という御座敷遊びを楽しむ。「千里走るような藪の中を、皆さんのぞいてごらんじませ。金の襷にハチマキやっくらさあと、捕らええし獣は、トラトラ、トラトラ。」という歌につづき、屏風越しに虎か獵師か老母の姿で現れる。獵師は虎より強く、老母は獵師よりも強く、虎は老婆よりも強いと、ジャンケン的重要で、負けるとお酒を飲むという遊びで、勝つと相手を舞台に呼び込んで、盛り上がる。



最後には「奴さん」の踊りに続いて、アンコールに込めて「北新地音頭」～浪花夜桜一目観よとて車はしらせ息せききって、着いたところ北新地。来た来た来たさ。よいよいよ、北新地。」との踊りは手拍子も賑やかに宴を締めくくり。

午後9時、住大夫師匠もお礼の挨拶に添えて都都逸を披露いただき、桂春之輔師匠の大阪三本締めで宴はお開きとなった。

一般参加:岩本・大崎・大利・梅田・梅本のりふみ・桂春之輔・門山幸子・木村勝美・薩摩卯一・高橋様ご一行3名様・辰野美紀・田端正広・中馬弘毅・野杵育郎・都築様ご一行3名様・鶴太郎御一行3名様・中川・難波夫妻・浜上俊和・林信幸・林様ご一行2名様・春次・藤原剛・福本・本福寿司ご一行3名様・まなみ・森田秀朗・毛利・衣目・横田

塾生:・北原祥三・小林伊一・小林和子・佐々木英彰・阪口興下野譲・杉山英三・辰野幸正・田中捻三・谷福江・中村京子・中村孝史・原季美子・原田彰子・東口恵子・広里重子・藤戸捻也・松井佐知子・村上蕪芳・森欣子・米川俊信 (敬称略)